

同志社大学

2010年度 卒業論文

論題： 葬制の変容からみる地域社会
～鳥取県大山町を事例として～

社会学部社会学科

学籍番号：19071098

氏名：山口 拓志

指導教員：立木 茂雄

(本文の総字数：20,894字)

卒業論文の要約

山田慎也（2007）が和歌山県古座区のフィールドワークで明らかにした「地方の地域共同体は都市化の影響をそのまま受け取り均質的に葬制を変化させているのではなく、地域独自の論理により葬制を変化させている」という説を改めて検証する。具体的な調査の内容としては、筆者の出身地である鳥取県大山町を調査対象地として設定し、地域住民と地元葬祭業者にインタビューを行った。インタビューの主な内容は、葬制文化が伝統的な形式からどのように現在の形式に変容したかということと、葬制の変容をどのように考えているかという2点である。調査の結果、同じ町内でも地域によって伝統的な葬制が維持されている地域と、消滅しつつある地域が存在することが明らかになった。また地域による会館葬と自宅葬の比率の違いから、地域の葬祭業者の独自の論理も葬制の変化を多様なものにしていく要因であるということがわかった。このことから山田の説は現在でも有効であることを証明した。

[キーワード] 葬儀、葬制、葬祭業者、葬式組

目次

はじめに.....	1
第1章 先行研究	1
1,1 葬儀とは	
1,2 葬制文化研究の歴史	
1,3 地方の葬制研究	
1,4 研究テーマ	
第2章 調査概要.....	3
2,1 調査対象地	
2,2 調査方法	
第3章 調査内容.....	5
3,1 伝統的な葬制文化	
3,2 現在の葬儀の様子	
3,3 葬儀の主体	
3,4 葬儀の場所	
3,5 葬儀の変容の要因	
3,6 葬儀の変容に対する捉え方	
3,7 小括	
第4章 近隣地域の葬制.....	11
4,1 上坪部落について	
4,2 伝統的な葬儀	
4,3 葬儀は自分たちでやる	
4,4 地域が関わらない葬儀について	
4,5 小括	
第5章 地域の葬祭業者.....	13
5,1 三井葬祭について	
5,2 どのように地域に浸透していったか	
5,3 葬祭業者からみた葬儀の変容	
5,4 小括	
第6章 考察.....	15
おわりに.....	16

はじめに

近年、葬式は何かと話題に上がる。書籍では島田裕己の『葬式は、要らない』（島田裕己 2010）は日本の葬儀が高額であることに疑問を呈し、30万部を超えるベストセラーになっている。映画では「おくりびと」（滝田洋二郎監督 2008）が第81回アカデミー賞外国語映画賞を受賞し、それに伴い「納棺師」という仕事がメディアで大きく取り上げられた。また葬式業界では新規参入が相次ぎ、2009年には流通大手のイオンも葬儀ビジネスに参入し、低価格に抑えた葬儀サービスを提供している。一方で同社がサービスの一部として布施価格の明示化を行ったところ、全日本仏教会が布施は宗教行為だとし、宗教介入に当たると反発する騒動も起きた。このように現在葬儀に関する話題は事欠くことがない。

また葬式の形式も急速に変化しており、島田裕己はその象徴的な例が直葬であると述べている。直葬とは故人が亡くなった後、いったん自宅に遺体を安置し、近親者だけで通夜を行うものの、その後、遺体を直接火葬場に運び、やはり近親者だけで見送って、それで終わりにするやり方である。寺や葬祭場で最初の夜に通夜を営んで会葬者を呼び、翌日も会葬者を呼んで葬儀、告別式を営み、それから火葬する一般的な葬式に比べて、かなりシンプルな形式であり、近親者以外の会葬者を呼ばない点では、密葬、家族葬の一番簡略化されたものである（島田 2010）。

そもそもこのいわゆる〈葬式ブーム〉の発端は葬式の件数そのものが増えたことがその大きな要因の一つであろう。実際に日本の年間死者数は1989年の78万8,594人から2009年は114万4,000人となり、その数は20年間で30万人以上に増えた。（厚生労働省人口動態統計 2010年）単純に考えると20年前と比べると葬式の件数は30万件増えたのである。人々が葬式を体験する機会も増え、葬式と無縁であることが難しい時代になってきつつある。

そこで今回地方の葬儀に焦点を当て、地方独自の葬儀の現状を明らかにする。本研究の構成は、まず第1章で葬制文化の先行研究と具体的な研究テーマを明示し、第2章で主たる調査地の概要を紹介、第3章で調査内容を記述する。また第4章では別の調査地の概要とその調査内容に触れ、第5章では地域の葬祭業者に関する調査内容を記述する。最後に第6章で全体の調査結果の分析を行う。

第1章 先行研究

1.1 葬儀とは

そもそも葬儀とは一体何なのか。「葬儀とは葬送儀礼の略語であり、葬制とはひとの死をめぐる儀礼や諸風俗の総称として用いる」（内堀基光 1987）とあるように、まず葬儀とは儀礼の一種である。では日本の一般的な葬儀とはどのようなものなのか。『精選日本民俗辞典』によると、

葬儀は、死亡の確認から納棺まで、葬儀の式から埋葬（火葬）まで、埋葬（火葬）から忌明けから弔い上げまで、の4段階に区切ってとらえることができる。死亡の確

認から納棺までの間には、臨終の際の末期の水、急いで別火で炊く枕飯もしくは枕団子、死者を西向き北枕に寝かせる枕直しなどの儀礼がある。蒲団の上には魔除けの刃物をおき、枕元には枕飯を供える。近隣の家から手伝い人たちが集まり葬儀の準備をする。男は葬具作りや墓穴掘り、女は台所の賄い仕事などを分担する。通夜には家族は文字通り死者のそばで徹夜するか、また死者のそばで寝るといった例が多い。その間ずっと線香や蠟燭の火は絶やさない。納棺に先立ち、身内の者たちによる湯灌が行われ、白い装束を着せる。この間の儀礼では死体の保全と死者の靈魂の鎮めと魔除けが中心となっている。次に葬儀の式から埋葬（火葬）までの間には、僧侶による読経、引導渡し、参列者の焼香などが行われ出棺となる。葬列を組んで野辺送りが行われる。この読経、引導渡し、焼香が家で行われる場合とその他に庭や墓で行われる場合とがあり、それらを内葬礼、庭葬礼、墓葬礼などと呼んでいる。埋葬(火葬)では穴掘り当番の人たちが埋めてくれる前に必ず近親者が最初に土を一握りかける（火をつける）という例が多い。次に、埋葬(火葬)から忌明けまで、さらに忌明けから弔あげまでの儀礼についてみると、墓直し、寺送り、初七日、四十九日など、死者の靈魂の鎮送の徹底のための儀礼、そしてその後は、年忌供養、弔い上げなど、死者の靈魂との交流のための儀礼が中心となっている。(福田ほか 2006 : 315-316)

以上が一般的な葬儀の形式だが、後述の先行研究により明らかになっているように最近では病院での死亡の増加、火葬の普及、葬儀社の進出などの要因がもとでその形式に大きな変化が生じている。

1.2 葬制文化研究の歴史

次に葬制文化の研究がどのようにして今日に至るかを述べたい。山田慎也(2007)によると、日本の葬制文化に関する研究は近代に民俗学が成立し展開していく中で常に重要な地位を占めてきた。日本の葬制は、柳田国男をはじめとする多くの民俗学者によって固有信仰としての祖先祭祀のなかに位置づけられたことにより、葬制は死者が祖霊になるための過程として捉えられていった。その祖先祭祀研究は日本の家構造とも関連が深いため、民俗学だけではなく農村社会学や宗教学、文化人類学においても注目されてきた。高度経済成長期になると、第一次産業から急速に第二次、第三次産業へ生業が転換し、また労働力の移動によって、地方の村落社会では過疎化が生じ、都市では核家族が増えることで、祖先祭祀の変容はさらに注目されるようになっていった。近代から現代までの祖先祭祀の担い手の変容や都市における新宗教と祖先祭祀の関係など、社会学や人類学、宗教学など多数の研究が登場してきた。一方で民俗学では伝統的な葬送儀礼が問題の関心となるため変容については民俗調査の対象とされなかった。よって葬制の変容についての研究は隣接する分野から本格的に始まったという(山田 2007)。

1.3 地方の葬制研究

ここで地方の葬制文化の変容についての研究の具体例を挙げると、福澤庄司は長野県松本市を調査し、葬儀の担い手が近隣互助組織である隣組から、専門業者である葬儀社へ変化しており、大都市ではすでに一般的な葬儀形態が各地方でも急速に進行しつつあること

を指摘した（福澤庄司 2002）。武田正は伝統的な葬儀が変容した象徴として土葬から火葬への転換を挙げ、さらに葬儀社が介入することで葬儀の場所も自宅、公民館、寺からセレモニーホールへと移り変わると山形県米沢地方を中心とした調査で明らかにした（武田正 2002）。また嶋根克己は、東京におけるある家の葬儀を事例にあげながら、東京における葬儀の方式や関係者の関わり方の変化を指摘した。それは葬儀が地域共同体による協力、実施から脱出し、家族のものとなり、さらには個人のものとなりつつあるというもので、死が個人化している状況であるという（嶋根克己 2001）。

一方でこれらの地方の葬制研究に対して山田は別の見解を述べている。山田によると、村落社会における葬制の変容は近代化に伴う地域共同体の解体と個人化という一元的な伝播論に陥りがちであり、葬儀の変容を扱っている宗教学、社会学などでは都市化を分析の前提としており、葬儀の変容を地域社会の崩壊といった社会構造の変化に一元的に結び付け、日本全国が一樣に変化していくが如き前提に立っている。そこではその過程にいたる要因やその意味はほとんど問われることはなく、ただ最終地点としての都市化された葬儀があるという立場である。しかし和歌山県古座区での葬制文化に関するフィールドワークを行ったところ、そこでの葬儀の変容には、地域内の〈葬儀に詳しい人〉とされる知識人が積極的に関与し、新たな儀礼の様式を導入する必要があまり感じられないように思われる場合でも、それを取り入れており、その結果、通夜の簡略化、葬式の式場の変化、葬式後の供養の繰り上げなどが進み、周辺地区の中でも最も葬儀が変化、簡略化された地区となっていることがわかった。その変化は都市化による社会変化とは言いにくく、古座区という地域社会が依然として大きな力を持っており、葬儀においても自律的に機能しているがゆえの変化である。つまり地域社会が主体的に儀礼を変化させている。よって地域社会はそれぞれさまざまな社会的、文化的背景を持っており、葬制の変容もそれらの背景の影響を多分に受けている。そして葬制の変容は一般に理解されている社会構造の変化よりもむしろ地域の論理によって変化しており、一元的な変化ではなく、地域のあり方について問う必要があるという（山田 2007）。

1.4 研究テーマ

「地方の地域共同体が都市化の影響をそのまま受け取り均質的に葬制を変化させているのではなく、地域独自の論理により葬制を変化させている」という山田の調査結果が現在でも有効であるか否かを改めて検証したい。特に山田がフィールドワークを行ったのが 90 年代後半であるのに対し、筆者は 2010 年の最新の調査を行う。また調査対象地を鳥取県西伯郡大山町にすることにより、新領域における地域独自の論理、近代化の影響を発見できると考えている。

第 2 章 調査概要

2.1 調査対象地

(1) 鳥取県大山町

鳥取県西伯郡大山町は鳥取県西部に位置する人口 1 万 8,183 人の町である。北部は日本

海に面し、南部は中国地方最高峰の大山（1,709メートル）がそびえる起伏に富んだ地である。主な産業は農業・畜産・漁業・観光業である。農産物では紅茶やブロッコリー、水産物ではサザエ、板わかめなどが特産である。観光業では国立公園大山の大自然をメインに、スキーや登山などアウトドアレジャーの地として県内外から観光客を集めている。また県西部の中心都市米子市の東隣りに位置するため、そこへ通勤、通学する人々も多い。近年無料バイパスが整備され大山町から米子市までは車で20分少々で行けるようになった。大山町は2005年に旧大山町と隣接する名和町、中山町の3町が合併し現在の大山町となっている。

(2) 下木料部落

今回特に中心的に調査した地域は筆者の育った地でもある旧名和町の光徳地区下木料部落である。この部落は旧中山町との町境に位置し、日本海の沿岸を東西に沿った海辺の集落である。浜辺は公式な海水浴場ではないが、砂浜であるために夏になると海水浴客が多く訪れる。また集落の西端と東端の防波堤が途切れた海岸はサーフィンの好スポットとして知られ、波の高い日は多くのサーファーが集まる。戸数は37で、住民の多くは高齢者が占めている。

部落の運営は区長（1年交代）を首長とし、部落内の除草作業、海岸清掃を年に数回行う。また部落の中心にある「みろくさん」と呼ばれる弥勒菩薩像を据えた御堂の掃除が年に一回行われ、その祭りも小規模ながら現在も夏に行われている。過去には子どもを持つ親が中心となって隣の上木料部落と合同で「木料こども祭り」という夏祭りを行っていた。部落内を子どもが神輿をかついで練り歩き、道端からお年寄りが声援を送るといった地域全体が盛り上がるイベントであったが、子どもの減少に従い10年前を境に行われていない。実際に光徳地区内にあった小学校も近年廃校となり、現在部落内の数人の小学生は旧名和町の中央にある小学校へバスで通学している。

葬式の際には部落内の葬式組が主体となって葬式を行った（近年その形態に変化あり、後述）。1組から4組まで部落内は4つに分けられており、葬式の際には遺族の所属する組と、隣の組との二組で葬式を取り仕切った。この二組の組内の家からは男女一人ずつ、勤めている人も休みをとって参加した。部落内の多くの家は近隣の倉谷部落にある曹洞宗法恩寺の檀家であり、葬式、法事の際はそこから住職を招く。その他にも神道、日蓮宗を信仰する家も存在する。鳥取県西部は古くから両墓制の地域であるため墓地は2か所存在する。そのひとつの遺体を埋めるステバカ（ウメバカ）は日本海を背に急こう配の坂を上った部落のはずれにあり、もうひとつのアゲバカ（マツリバカ）は墓石を据えたいわゆる一般的な墓で、海岸沿いの住宅密集地のすぐそばにある。

2.2 調査方法

具体的な調査方法としては地域の住民にインタビューを行い、地域の葬制文化について、その変容過程、その変容に対する捉え方などについて語ってもらった。インタビュー時間はそれぞれ1時間程度である。また多角的な視点を取り入れるため、地元の葬儀社の社長にも同じようにインタビューを行った。

調査にあたって分析の軸となる項目を抽出した。一つは地域の〈伝統的な葬制文化〉と